

二 中村階層理論とN・ハルトマンの 範疇法則について

——階層理論の哲学的基礎づけの試み——

杉 田 勇

序

一 対象の層位的構成

- (一) 実在的世界の構造
- (二) 法並びに法学の体系の階層構造

二 階層の論理と範疇法則

- (一) 階層理論の根本理念とその学的基礎づけ（法理と方法論）
- (二) 包摂の論理

- (1) 包摂の論理と再現の法則
- (2) 変貌の論理と変化の法則並びに新規の法則

二 中村階層理論とN・ハルトマンの範疇法則について（杉田）

- (3) 構成の論理と上部構築について

(三) 肯定の論理

- (1) 肯定の論理と層独立性の法則並びに質料の法則
- (2) 肯定の論理と妥当・凝集法則
- (3) 「受胎」・「自己増殖」と新生説・開展説

(四) 事実の論理

- (1) 事実の論理と強さの法則
 - (2) 事実の論理と層独立性の法則並びに自由の法則
- 結語

序

中村・階層理論 (Schichtentheorie) は、訴訟法学の立場から、その考察の対象たる法及び法学を階層構造をもったものと想定し、ここから階層相互間の理論、いわゆる「階層の論理」 (Schichtenlogik) を構築する学問方法である。中村博士が三十年にわたる思想的遍歴の結果到達したこの学問方法論は、N・ハルトマンの存在論すなわち範疇理論と発想の仕方において極めて共通したのが見出される。もとより、訴訟法学の立場からする階層理論の構築には、それに固有の方法論、すなわち「階層の論理」が基礎になっていることは言うまでもないが、これを更に哲学的に、存在論的にいかに基礎づけるか、ということが残された問題であると思われる。中村博士は、N・ハルトマンの「範疇法則」 (Kategoriale Gesetze) を法学の分野に取り入れ得るか否か、検討を要する今後の課題であると言われるが、本稿は、博士の論文、特に「学問の方法と訴訟理論」^(一)において展開されている学問方法論としての「階層の論理」を、N・ハルトマンの存在理論である「範疇法則」を手がかりとして、これを哲学的に、存在論的に説明しようとする試論である。そこで先ず両者における階層構造を分析し、次いで階層構築の基本原理たる「論理」と「法則」の比較、検討を行なうことにする。

(一) 本稿は博士の論文「学問の方法と訴訟理論」(昭和四四年、国士館法学創刊号) を主として取り上げたが、その他「法の体系と民事訴訟制度」(昭和三九年 日本学士院紀要 第二二卷)、「私の裁判理論」(昭和四一年 早稲田法学会誌一六卷)並びに「訴訟上の請求の個数と範疇」(昭和四二年 国士館大学創立五十年記念論文集)をも参照した。

一 対象の層位的構成

(一) 実在的世界の構造

ハルトマンの階層観を理解するには、階層を三つの意味に分けて考察する必要がある。彼の「階層」概念には、(一)「存在」階層、(二)「範疇」階層、(三)「規定の型」の階層が含まれているからである。従ってハルトマンの階層理論という場合には、これら三者についての理論を意味することになる。しかも三者は単独に在るのではなくて、相互に密接な関連を保ち、互いに他を予想しているという関係に在るのである。ただし「存在」はなんらかの意味において「規定」されて在るのであり、無規定的な存在は非存在・無に等しいと言えるからである。しかも「存在」の規定は「範疇」を当然に前提としているからである。それゆえにこのように解するならば、ハルトマンの階層の理論とは、端的に存在論を意味することになる。

ところで「存在」階層という場合の「存在」概念の内容であるが、ハルトマンによればそれは「実在的存在」 (reales Sein) と「理念的存在」 (ideales Sein) とに二分される。ハルトマンにおける実在的、理念的の区別の基準をなすものは、時間性、過程性格、変化等である。理念的存在にはこれらの特性は認められない。後者に属するものとしては(一)数学的なもの、(二)論理的法則、(三)本質、(四)価値が挙げられる。ここでいう存在階層を構成

しているものは「実在的存在」であって、ハルトマンはこの存在の全体を「実在的世界」(die reale Welt)と呼んでいる。

この実在的世界が階層的な秩序を有しているという思想の淵源はアリストテレスに求めることができる。彼によれば無機物の上に植物、動物、人間という順序で存在者の段階が形成されているのである。だが階層観に関してはハルトマンとアリストテレスの間には原理上の違いが存する。今これを要約すれば次の二点が挙げられる。第一に、ハルトマンは存在階層を無機的、有機的、心的、精神的の四つの存在層に分けているのである。ハルトマンによればアリストテレスの階層の建て方は「存在形象」・「綜合形象」(Gesamtgebilde)を基礎としたものであって、存在層の序列を現わしてはいないというのである。存在形象は一つの層の純粋な代表者とはなり得ない、というのがその理由である。たとえば人間という存在形象そのものが、物質的、有機的、心的、精神的といった異質的なものを綜合した形象なのである。このような存在形象そのものがすでに実在的世界の階層秩序を前提として成り立っているのである(後出図表参照)。存在論的分析は存在形象から出発することはできないというのが、ハルトマンの階層観の根本思想となっている。第二にアリストテレスでは「形相」(Form)の原理が優位を占めていて、それは運動の原理であると共に、目的の原理ともなっている。従って一切の存在階層が、同一性質の範疇によって規定され、根底において同質であることになる。アリストテレスの階層観の根底にあるものは目的観であるが、ハルトマンは形而上学的な目的論的思想を階層理論から排除している。なぜならばハルトマンは立場として「形而上学の最小」(Minimum an Metaphysik)を採っているからである(存在論から擬人観の排除)。

このように両者には階層の建て方、見方において根本的相違が認められる。ハルトマンの実在的世界の構造は「そこにおいては、物、生物、意識、精神といった異質のものが共存し、重り合い、相互に影響し、担い、妨げ、部分的には争う^(一)」ということがその特色となっている。実在的世界は四層から成る統一体である。しかし層限界の連続的移行といった一元論的な見解は、形而上学的なものとしてハルトマンの容認しないところである(ライプニッツの連続律は下への越境、唯物弁証法は上への越境)。従って各存在層の間には切れ目があることなり、ハルトマンはこれを「層距離」(Schichtendistanz)と呼んでいる(所与の最大 Maximum an Gegebenheit を取り入れる立場)。層距離は四層の異質性を、従って層と層との間の不連続を示すものである。しかし実在的世界が四層の統一体だとすれば、現象的には各層間の不連続が認められても、その背景には隠れたる連続が予想されねばならない。四層の結合統一、不連続の連続の問題を存在論的にいかに解すべきか。この問題は「範疇法則」における重要概念たる「上部形成」(Überformung)及び「上部構築」(Überbauung)が、これを解き明かす鍵になると思われる。この点については後述する。

(一)「存在論の基礎づけのために」(Zur Grundlegung der Ontologie) 一九三五年 第三章 第八節の五。
ところで実在界の層位的構成を解明するためには、各層の在り方を規定する範疇の探究がなされなければならない。ハルトマンはこれを「範疇分析」と呼び、そこから一連の「範疇法則」を導き出し、それによって各層の在り方(横の関係)と各層間の関係(縦の関係)を明らかにしようとしている。その場合、彼の取っている方法は実証的、経験的であり、一定の立場からする形而上学的独断、イデオロギーを極力排斥する(立場からの自由)。従っ

て彼の存在理論は閉鎖的でなく、開放的である。この点、法学の分野においても受け入れられる構造性格をもつと言える。

ハルトマンの存在階層観によれば、高次の存在層はそれ自身で単独に存在しているのではなくて、低次の存在層に担われ、それに依存して在るのである。たとえば、いわゆる「客観的精神」にしても、それは実在する意識に担われており、また後者は有機体に依存している。更に有機体も物理物質的存在に基づき、その法則を包摂している。従って存在論的には宙に浮いた精神的存在はないということになる。右のことから各存在層に対応して見られる範疇群の階層にも同様な関係が考えられる。ハルトマンは「認識の形而上学綱要」^(一)(一九二一年)の中で次のように述べている。高次の範疇はすでに複雑な構造を有している。「時間」・「空間」も単純で最初の範疇ではない。両者の中には更に一層単純な範疇的要素が含まれている。すなわち「延長性」、「秩序性格」、「系列性格」、「同質性」、「連続」、「不連続」等々がある。更に「実体」、「因果性」の範疇となると一層複雑となり、これらは「時間」、「空間」を従属的な要素として包含している。しかし「実体」、「因果性」の範疇も一層高次の範疇、すなわち「生命」、「発展」、「再生産」、「淘汰」といった範疇の要素となる。このように高次の範疇は低次の範疇を要素として含んでいるが、しかしそれは単なる総合ではなく、そこには「新規なもの」(Novum)が現われている。最上位にある精神的存在の例が示しているように、範疇層は高次の存在層における程内容が豊富で複雑になっている。だが存在層と範疇層が対応しているといっても、最下位の無機的存在の範疇が最も単純で要素的なものであるかという点、そうではない。範疇の階層はそれに対応する実在層がなくても、更に下方にまで及んでいる。実在層が四層だからといって、範疇の層が同一である必要

もなければ、また同一であることもできない。なぜならば実在的存在の範疇があるばかりでなく、理念的存在の範疇もあるからである。範疇階層の関係からすると、無機界の下方には更に非物質的な純粹数学の対象界が横たわっている。これは量的範疇に基づくところの具体者であるが、実在的な具体者ではなく、その在り方は前述の如く理念的である。だが数学的存在の範疇をもって最低次の、最も要素的な範疇とすることはできない。最下位にあるとされるのが「基本的範疇」^(二)(Fundamentalkategorien)である。ハルトマンはこの範疇の層位についてこう述べている。「基本的範疇は序列からすると無機的なものの範疇の下方に存する。従って基本的範疇に付従するような実在的世界の特殊な層はもはやない。すなわち換言すれば、実在者の層は物質的な領域でもって断絶するが、範疇層はこの限界で中断しないで、更に下方へと延びている。」なお留意すべきことはハルトマンにおいては、範疇は具体者に即した「原理——存在」(原理であること・Prinzip-Sein)であって、自体的に独立して存在するものではない。従って原理と具体者の二元論(プラトンの分離説)は許容されず、原理(範疇)は具体者に対してのみ原理であり、それは具体者において尽きるのである(妥当法則)。それゆえに基本的範疇としても、その具体者が欠けているわけではない。ただそれは他の範疇のように特種存在層に制限されて在るのではなくて、すべての存在層を貫いて、これを規定しているのである。別言すれば基本的範疇は実在の世界と理念的存在に共通した原理なのである。

(一) Grundzüge einer Metaphysik der Erkenntnis 1921. 第三四節の四、参照。われわれはここに「範疇法則」(一九二六年)以前におけるハルトマンの範疇階層観を見ることができらる。

(二) 参照「実在的世界の構造」(Aufbau der realen Welt 1939) 第二一節、第二四節。基本的範疇には次の群が挙げられる。(一)様相的範疇の群。可能性、現実性、必然性、不可能性、非現実性、偶然性の六つの様相がある。これらはまだ一切

の内容的特殊性の手前にのみ存し、在り方のみに関係する。实在界の構造にはまだ触れていない。(二)要素的範疇の群。これは構造的の性格を有し、一二組の対偶関係が挙げられる。一、原理——具体的なもの、二、構造——様相、三、形相——質料、四、内的なもの——外的なもの、五、規定——依存、六、性質——分量、七、統一——多様、八、一致——対抗、九、対立——次元、一〇、不連続——連続、一一、基体——関係、一二、要素——組織。尚、「範疇法則」(邦訳)三八頁以下参照。

右の範疇の階層ということから、各存在層にはそれに固有の「範疇複合」(Kategorienkomplexe)があつて、そこには一定の規定仕方があることが想定される。ハルトマンはこれを「規定の型」(Determinationsstypen)と呼んでいるが、範疇階層に対応して、いかなる「規定の型」の階層が見出されるであろうか。先ず無機界の下にある数学的存在の範疇に関しては数学的规定の型がある。この規定は単なる理念的法則ではなくて同時に實在的法則であり、しかも因果律よりも更に根本的な法則である。数学的规定はそれ自体としては時間的過程の法則ではないが、この過程を支配する因果連関の中にすでに範疇的要素として含まれている。自然現象が数学的に計算され得るのはこのことに基づくのである。この規定の型の下には更に普遍的な規定がある。基本的範疇が一切の存在層に共通してあるように、最低次の規定は理念的並びに實在的存在領域にわたる最も基本的なものである。この規定は存在関係一般を問題とするものであつて、理念的存在領域では「充足理由の原理」(Satz vom zureichenden Grunde)として知られ、實在的存在領域では、「存在論的に一次的な規定」(ontologisch Primäre Determination)と呼ばれる^(一)。このように二、三の例からしても、規定の型には階層関係のあることが推察される。では實在的世界の各層にはいかなる固有の規定形式があるだろうか。規定の型は少くとも四種類あるはずであるが、ハルトマンは形而上学の最小という立場から、範疇

分析にはいり得るものは二つしかないと言う。すなわち、われわれに直接知られ得るのは、物理物質的存在を支配する「因果連関」(Kausalnexus)と精神的存在における「目的連関」(Finalnexus)の二つの型のみである。これらの中間に存する規定形式には分析の及び難い残余がある。形而上学の最小という立場から、目的論的世界観(アリストテレス、ライプニッツ)や弁証法(ヘーゲル)は取り入れることはできない。それゆえに有機的存在について言えば、なるほどそこには合目的関係、全体の自己規整、並びに胚細胞からの有機体の再構成といった、因果連関とは異った規定形式が見出され、しかもそれは外的結果から見れば目的連関と区別できない程似ているが、目的を設定する意識がそこには欠けている。従つてハルトマンは有機体の規定の型は「有機的連関」(nexus organicus)と形式的に呼び得るにすぎないと言っている。心的存在についてもその不明の度には変わりはない。心的働きの出現、その過程及びその相互関体を支配する規定の型を「心的物理的連関」(nexus psychophysicus)と仮りに言つたところでそれだけでは不十分である。なぜならば心的の働きには意識されざる背景から来る一つの要因があつて、それが意識に上る時には合目的性の形式を取るが、それが意識に上る前にいかに規定するかは不明であるからである。われわれには实在界の最低層と最高層の規定の型しか知られておらず、中間に存するものは推理の域を出ない。これを目的論的もしくは因果論的に解決しようとすることは、規定の型の階層関係を無視するものであり、ひいては階層理論の崩壊に導く。中村・階層理論で言うところの「単一の場の理論」に逆戻りすることになる。ではこの規定の型の階層関係はいかなる在り方を示しているだろうか。ハルトマンはそれを「規定の型の上昇」(Überhöhung der Determinationstypen)と呼んでいる。それは範疇の階層において見てきたように、低次の範疇が上層に再現すると同じく、低次の規定形式

が、高次の存在層の中で再現し、高次の規定のモメントとなり、高次の規定と協同して働くという関係を表わしている。「規定の型の上昇」は先ず何よりも最低次の規定の型である因果連関の上昇を問題にすべきであるから、これの構造分析を行なう必要があり、次いでそれがいかにして高次の規定たる目的連関の中に再現しているかを検討しなければならぬ。右の分析・検討の帰結は、後述の「裁判」の理論、ひいては連続体としての体系構造と密接な関係を有すると思われる。そこで因果連関の構造特質を見ることにする。

(一) 参照「倫理学」第七一節の二、第六九節の三。「可能性と現実性」第一篇、第一章、第一節の一。

因果連関とは先行者によって後行者が一方的に規定される関係をいう。この規定形式は、一度因果過程の全体連関の中に含まれた規定者(部分原因)はそれにおいて結果を惹起してしまわないうちは、もはや再び消滅され得ないということの意味している(因果作用の制止不可能性の法則^(二))。しかしこの規定者のもつ作用は絶対的のものでなく、他の分力(Komponente)によって相殺され、中性化され、また内容的に変更され得ることもある。なぜならば作用の制止不可能性は、新しい規定分力が加入し得ないことを意味しないからであり、従ってまた原因複合体の全体結果が変化し得ないことを意味してはいないからである。むしろ全体としての結果は、新たな分力が全体連関の中にはいつて来るや否や、制止不可能性の法則に基づいて変化せざるを得ない。それゆえにこの法則と並んで因果連関には無関心性という構造型格があることになる。すなわち因果連関は新しい規定者のはいつて来ること(いかにして、どこからということに無関係に)に抵抗することなく、一たん自己の中に含まれた一切の規定の糸は忠実に保持するのである。このように因果の過程というものは新規な規定者によって中断されるのではなくて、単に脇にそれるにすぎない。因

果の流れそのものには目標・方向はない。それは盲目的であり、規定の由来のみならず、結果に対しても無関心である。ハルトマンはこうした因果連関の構造特質を「誘導可能性」(Lenkbarkeit)と言い、範疇的には「上部形成の可能性」と呼ぶべきであろうと述べている。^(三)

(一) 「実在的世界の構造」第六〇節の六。

(二) 同右。「範疇法則」八一頁以下。

(三) 同右。

因果連関においては後行者は先行者によって規定された(前節)。従ってそこでは依存性は時の流れに従って「正進的」である。これに反して目的連関においては先ず最終目的が確立され、そこから手段が逆に決定される。すなわち先行者は後行者によって規定され、依存性は時の流れと逆(逆進的)になっている。そこではすべてが目的によって規定され、この意味において原因と結果との関係は目的と手段との関係に置き換えられている。目的連関の第一条件は目的の実現に先き立って目的が予め定立されていることである。しかし目的を立て得るのは意識のみである。ハルトマンによると目的連関の範疇的構造は三つの段階より成り立っている(三層的結合としての目的連関^(一))。(一) 意識による目的の設定(実在的な時の流れを飛び越して、未来の先取として)。(二) 目的による手段の逆進的規定(意識による選択)——最終目標に最も近い手段から始めて、行為者の力の範囲内にある最初的手段に及ぶ。(三) 目的の実現——逆進的に選択された同じ手段の系列を逆にして、最初的手段から時の流れに従って目的の実現を目指す。右のうち(一)(二)は意識においてのみ行なわれ、(三)の目的の実現が初めて本来の行為となる。それは時間において

正しく経過する實在的過程である。しかもこの實在的過程はその規定形式から言えば全くの因果過程である。けだしそこでは手段の系列は原因の系列として作用し、目的を結果せしめるからである。この過程の因果性は目的的に導かれた因果性である。われわれはここに目的構造における因果構造の再現を認めることができる。すなわち高次の規定は低次の規定を排除することなく、否、廃棄することはできず、それを自己の構成要素として包摂するのである。目的の連関は因果連関の上部形成であることが分析の結果出てきたのである。因果連関はもともと上部形成されるような仕組になっているのである。つまりそれは自己特有の構造を失うことなしに、超因果的規定を取り入れることができるのである。このような「規定のプラス」の可能性は前節に述べた因果連関の無関心性に基づくのである。

(一) 「範疇法則」八六頁以下。「實在的世界の構造」第六一節の三。「倫理学」第二〇節の三。「目的論的思惟」六九頁。

各存在層にはそれに固有の規定の型があるべきだが、範疇分析にはいり得るのは物理的出来事の因果連関と人間の意志・行為の目的連関のみであった。もし二者択一的に一方のみをもってすべての存在層を律するとすれば、因果決定論か目的決定論とならざるを得ない。かかる一元論的決定論に対して、ハルトマンの規定の型の階層理論は、極端な思弁的理論の中道を行くものである。この中道理論の集約的表現と見られるべきものが「依存法則」である。今、両者の関連を要約すると次の如く言われ得るであろう。低次の規定（ここでは因果連関）は常に「強く」、高次の存在層（精神的存在）まで貫通している。しかしその貫通は高次の連関によって「質料」の如く上部形成される従属的な契機としてである。高次の規定（目的連関）は低次の規定（因果連関）に対して「新規なもの」である。しかしこれは新規なものとして低次の規定に対して「自由」である、と。右によって「規定の型の上昇」形式の内実は解明されたわけである。

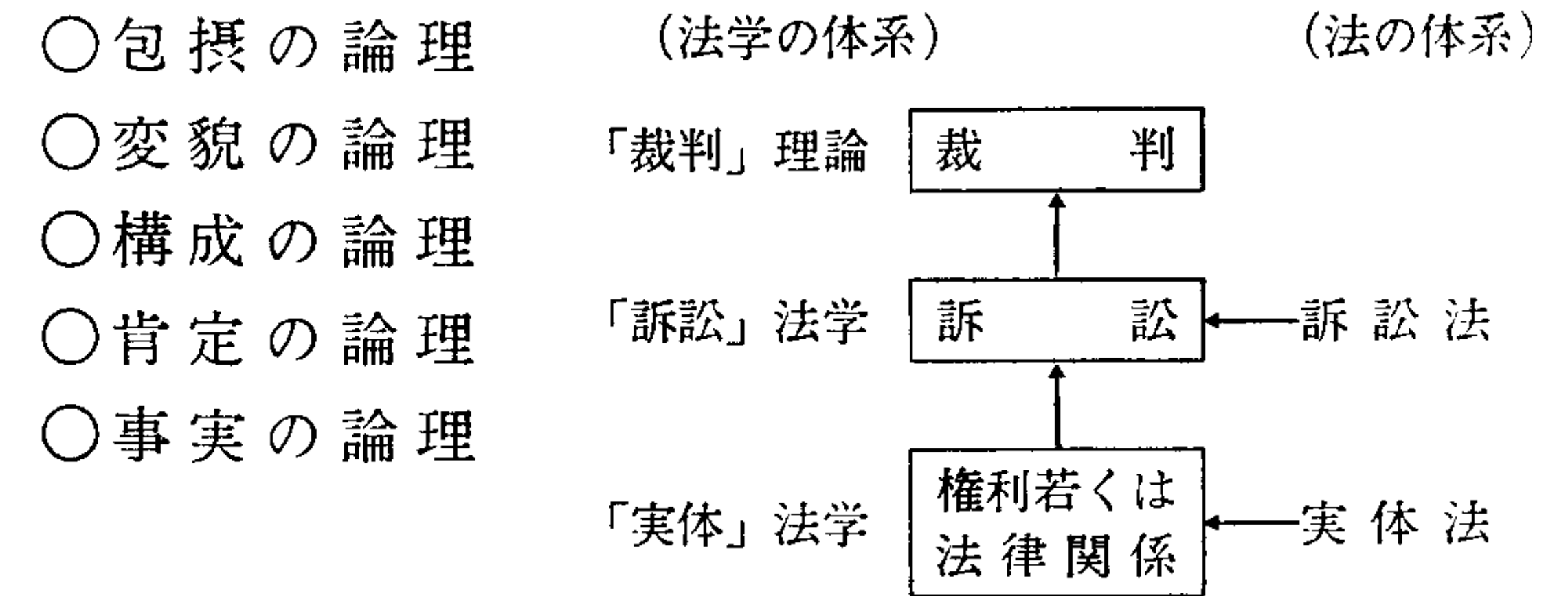
ある。

(二) 法並びに法学の体系の階層構造

實在の世界は四層から成る統一体であり、これを「存在」階層、「範疇」階層、「規定」の階層に三分して考察して来たが、これに対して訴訟法学の立場から中村・階層理論はハルトマンとは別個に独自の階層構造を想定し、階層相互間にいわゆる「階層の論理」の存在すべきことを説く。階層理論は法並びに法学の存在論であり、その発想の基本においてハルトマンの存在理論と極めて近似したものが見出される。すなわちその層位構成を見るに、一方において「法の体系」が実体法・訴訟法（一般法規範）並びに裁判（個別法規範）の三段階に構成され、他方これに対応して「法学の体系」が、実体法学、訴訟法学並びに裁判論という階層構成がなされている。しかしてこれらの階層の諸関係を表わしているのが「階層の論理」であり、「包摂」・「変貌」・「構成」・「肯定」・「事実」の論理として展開されている。今これをハルトマンの階層観と対比して図示すると、構想の仕方に類似性のあることが見取れる。

左の図式が示すように実体法と訴訟法とは次元を異にしたものであって、中村博士は「法規範の具体化・個別化の過程」という観点から、訴訟を「発展する過程」として捉え、法の体系を実体法、訴訟法、裁判の序列に、しかも非可逆的な秩序をもったものとして構成しておられる。これは範疇法則三、四にあたる「階層法則」・「依存法則」において見られると同じく、動態的考察方法に基づくものである。更に法学の階層構造を見るに、ここにも法の体系構造との類似が認められる。すなわち「実体法学の終るところに訴訟法学が始まり、それが裁判理論につながって終結す

階層の論理 法並びに法学の階層構造



一 対象の層位的構成

実在的世界の構造

(Aufbau der realen Welt)

(規定の型の階層)	(存在階層)	(範疇階層)	綜合形象 存在形象
Finalnexus	Geistiges	× × × × × × × ×	人間
(nexus psychophy- sicus)	Seelisches (Bewusstsein)	× × × × × × × ×	(Überbauung) 高等動物
(nexus organicus)	Leben (Organisches)	× × × × × × × ×	(Überbauung) 生物
Kausalnexus	Physisch— Materielles Sein	× × × × × × × ×	(Überformung) 物

(上部形成)

範疇法則

(I~XVI)

1. 妥当法則
I—IV
2. 凝集法則
V—VIII
3. 階層法則
IX—XII
4. 依存法則
XIII—XVI

Fundamentalkategorien

- ① Kategorien der Modalität
und
- ② eine Gruppe von Element-
alkategorien

二七二

る」となすのである。しかもこの法学の体系は法の体系と照応関係を示している。要するに中村・階層理論の垂直並びに水平関係と、ハルトマンの實在的世界の構築の仕方との間には共通した発想法が見出されると思われるのである。問題は両体系の外形構造ではなくて、その内実である。「階層の論理」と「範疇法則」の比較検討が必要とされる所以である。

二 階層の論理と範疇法則

(一) 階層理論の根本理念とその学的基础づけ (法理と方法論)

中村・階層理論は民事訴訟法学の根本問題である訴権論から出発して構築された訴訟理論である。従って階層理論を理解するためには、先ず実体法と訴訟法との関係を正しく把握しなければならない。両者の関係を一方を主にして一元的に解釈するか、あるいは二元的に見るかによって、訴訟理論上、種々の訴権学説が生じたことは周知の通りであるが、階層理論は、これら学説の批判から、特にその方法論的考察、反省の結果生み出されたものである。私法的訴権説(私法的一元観)によれば、訴訟の以前に実体法上の権利(請求権)が実在し、訴訟はそれを行使する場に外ならないがゆえに、訴訟の実体に関しては実体法理が支配する。私権なければ訴権なし、ということになる。従って訴権は中村博士の言われる如く「諸求権の訴訟における変貌」と見なされる。これは訴訟法を実体法に従属せしめる実体

法優位の訴訟理論である。私法的訴権説は、誤判の問題、確認訴訟及び創設訴訟が独立して類型化されるに至り、私法理論では処理できない難問に逢着して、その支柱を失った。これに代わって公法的訴権説が抬頭して来たが、中村博士はこれを二分して、(一)前期(対立)二元観の訴訟理論と、(二)訴訟法的一元観の訴訟理論となす。前者は訴訟法に基づく訴訟理論の体系を構成し、実体法理にその存在の場を与えんとするものである。博士にこれに対して、実体法と訴訟法とは異別の法体系を構成しているがゆえに、「訴訟」の枠内において、双方の法理にそれぞれの支配領域を与えながら全体として統一した訴訟理論の体系を構築するには、多くの学問方法論上のアポリアに直面する、と批判される。中村博士によるとヘルヴィッヒ、シュタインの前期二元観は、実体法と訴訟法との関係について二世界説ないし二要素説の立場にあり、対象把握の方法において反省が不足しているため、アポリアにつき当るとされるのである。^(二)これに対してローゼンベルク、シュヴァープは訴訟理論の領域から実体法理を全面的に排除する。訴訟法的一元観の訴訟理論、訴訟モノロー主義と言われるものである。だがこの一元観は実体法的モメントを全面的に切り捨てて、その存在の「場」を与えない訴訟理論であるから、単なる手続法理にすぎないものとなる。このように公法的訴権説の下にある訴訟理論は、実体法と訴訟法とを併列の關係に置くか、または実体法を無縁の關係に置くかのいずれかで、いわゆる「単一場の理論」が発想の基盤となっている。これを要するに対象把握の仕方、態度に問題があるのである。これに対して中村博士の訴訟法理の根本命題は「訴訟は実体法と訴訟法との綜合の場であり、その綜合は国家意思の宣言たる裁判において完結する」というにある。換言すれば、訴訟は訴訟法によってその手続面が構成されるが、その手続きの帰結たる判決においては実体法によって裁判がなされる、とするのである。この観点に立

って博士は、具体的存在たる「訴訟」を分析して、これを「訴」と「諸求」とに理論上分離せしめ、前者には訴訟法的モメントが、後者には実体法的モメントが包含されているとなす。これは具体的存在たる「訴訟」に「訴」と「諸求」とが内在していると見、それぞれを相關的に、しかも別個に考察の対象とする学問方法である。従って訴訟法学は、実体法学と関連を保ちつつ、訴訟法理と共に実体法理をも包摂しなければならない。このようにして初めて訴訟の全体像が正しく把握されるのである。^(三)問題はいかにして実体法に依拠し、実体法学に連結した訴訟理論を構築するかにある。中村博士は、これまでの訴訟理論の方法論上の欠陥を摘出すると共に、訴訟実体理論を新たに構築する意図をもって、その範型を自然科学の学問方法と次元の層位構成に着目され、訴訟法学の立場において独自の階層理論を体系化した。階層理論は、法並びに法学の階層構成と階層の論理より成る。前者の構成の仕方がハルトマンの存在論のそれと近似しているが如く、階層理論の原理たる階層の論理もまたハルトマンの範疇法則と相通ずるものがある。両者は学問の対象、領域を異にするとはいえ、その学問方法、態度において一致せるがゆえである。では階層の論理と範疇法則とはいかに照応、符合しているか。

(一) 「学問の方法と訴訟理論」一二頁—二六頁。

(二) 博士はこの立場を「綜合二元観」と称しておられる。

(二) 包摂の論理

(1) 包摂の論理と再現の法則

中村博士は、訴訟は事件に対する裁判を志向して、「訴」の提起から「判決」の確定に至るまで一貫する連続体で

あるとされ、これを誤りなく把握するため発展の契機を含めた論理の必要性を説かれている。従って対象把握の仕方は私法学で行なわれているような静態的なものではなくて、動態的なものでなければならぬ。かかる動態的考察に即して博士は階層の論理を構想されたわけであるが、その基本となるものは「包摂の論理」である。ここでいう「包摂」とは「上位階層における下位階層の包摂」を指す。注意すべきは包摂の仕方であるが、それは上位階層が下位階層を全面的に包摂するということではない。すなわちその意味内容は「上位階層における事物の構成にもつ限りにおいて、下位層の事物が上位階層に包摂され、その階層における事物構成のモメントに加わる」ということである。つまり実体法が全面的に訴訟法の階層に包摂されるというわけではない。具体的訴訟において適用される限りにおいて、実体法規範が訴訟の階層に包摂されるというのである。このように包摂が全面的ではなくて、「……の限りにおいて」と制限される理由は、階層理論が「法規範の具体化、個別化の過程」という観点から構築されているからである。この具体化、個別化の過程とは、別言すれば裁判を志向する過程であり、従ってそこには当然訴訟主体（裁判所・当事者）の具体的意思、合目的的行為が前提されねばならない。それゆえに包摂の論理を導く基調となるものは訴訟当事者の主体的、具体的意思でなければならない。中村博士はこの点に着目されて、「訴訟理論には訴訟行為に内在する当事者の具体的意思を織り込むことが必要である」と説かれている。^(一)

(一) 中村博士は民事訴訟法学の基礎的方法の一つとしての「具体的、現実的考察」に基づいて、訴、訴訟上の請求、申立、抗弁等の当事者の訴訟行為を実概念（行為概念）として把握、そこに内在する当事者の具体的意思をも実概念に属するものとされている。この意思について博士は次のように述べられている。「それは生きた人間（原告・被告）の具体的意思であり、私法学において、抽象的考察の対象となる人間疎外の抽象的意思とは異なる。訴訟において債権の全部を請求するか。或いは

は一部の請求に止めるか、何をもって請求の原因とするか。また、いかなる順位にて請求を併合するか。すべて当事者の具体的意思が、これを決定する。訴訟理論には、訴訟行為に内在する当事者の具体的意思を織り込むことが必要である。しかし従来の訴訟法学は、私法学の理論に引き摺られて、概してこの点の反省が行なわれていない。」（「学問の方法と訴訟理論」二六頁―二七頁）。言い得べくんば、これは訴訟理論上の「意思主義」「主体主義」の提示である。認識論上の主観主義と性質を異にすることは言うまでもない。

ちなみに右の考察方法は、行為の態様は別としてH・ヴェルツェルが「因果的行為論」^{（意思内容をすべて責任の問題に帰し、有意外的動作、結果を惹起する原因とされ、行為は）}（行為としての意思は抽象化された、単なるかかる心理的原因の因果的事実とする行為論）を排して、故意を構成要件の主観的部分として取り入れ、いわゆる「目的的行為論」を展開しているのと機を一にするものと言えよう。ヴェルツェルは刑法上の構成要件該当行為は、人間生活に存する目的的行為の中の一つの断片であり、「刑法上重要な行為」にすぎないとして、行為を二段階に分け、（一）行為意思の決定、（二）行為意思の実現（行為手段の行使）とする。しかし前者を更に（一）目的の決定、（二）行為手段の選択、（三）付随的結果の顧慮とに分析している。これは前述のハルトマンの分析の仕方と全く同じである。なおヴェルツェルは故意は内心的事実であるとして、これに対する責任を意思形成の瑕疵性（非難可能性）に求めている（参照 Das neue Bild des Strafrechtssystems 邦訳・「目的的行為論序説」Grundlagen der finalen Handlungslehre 邦訳・「目的的行為論の基礎」）。法は単なる「存在」ではなくて「規範」であり「妥当」である。価値的、規範的判断が要請される。「現行法」が das geltende Recht といわれる所以である。中村博士は「現実的考察」の下、更に実概念（行為概念）に「理念的（規範的）考察」を加えなければならないとされているが、これは注目すべき所説である。

さてこの「包摂の論理」は範疇法則における「再現の法則」と照応するものと思われる。いわく、「低次の範疇は高次の範疇においてのみその部分的契機として再現する。だが高次の範疇は低次の範疇においては再現しない。」（非可逆的）再現の方向は低次より高次へと、しかも再現の仕方は高次のものの部分的契機として上昇するのである。この上昇の仕方は全面的ではなくて、「消失」、「後退」する範疇もあるのである。これは次元の異質性に基づくのである。

って、「層距離の法則」がこのことを裏付けしている。「包摂の論理」も上位次元が下位次元を包摂するとなす非可逆的關係を示しており、しかも包摂の仕方が次元論からして再現の法則と同じ内容をなす。

(2) 変貌の論理と変化の法則並びに新規の法則

包摂の論理の系とも見られる「変貌の論理」は、包摂の結果について次の如く説く。すなわち、「下位層の事物はそのままの姿で上位階層に包摂されるのではなくて、上位階層における事物構成のモメントとして加わることによ
り、みずからに変貌を生ずる」というのである。右の説くところを範疇法則をもって表現すれば、「再現は低次のものがすべてそのまま高次の範疇において再現するという意味ではなくて、高次の範疇においてそれらが統一・凝集され、低次の要素は次第に覆われて多様に变化することを意味している。」われわれはここに明らかに「変貌の論理」と「変化の法則」との合致を見出す。更にこの「変貌の論理」の帰結として生じたものを範疇法則で定式化すればハルトマンの「新規の法則」となる。すなわち、「高次の範疇は内容的に多様な低次の要素によって組立てられるが、しかしその和に尽きるものでなく、常に低次の要素の中にも、その総合の中にも含まれず、それにも分解されない特殊なもの、新規なものの出現を含んでいる。これが層相互間の混合を防いでいる。新規なものは低次の範疇に対して独立である。」中村博士の階層の論理にこの「新規の法則」にあたる論理が特に取り出されて定式化されてはいないが、これは「変貌の論理」に内在しているものと見なしてよい。すなわち、たとえば中村博士は「変貌の論理」の実例として、「訴訟上の和解は、訴訟においてなされる私法上の和解契約であるが、それには訴訟法的モメントが加わり、私法上の和解そのものではない。」と言われているが、これは正さに「新規の法則」を具体化したものと言い得る。

(3) 構成の論理と上部構築

「構成の論理」も「変貌の論理」と同じく「包摂の論理」に内在していて、包摂の様式を原理としてそこから取り出したものと思われる。すなわち包摂に当っては「下位層の事物が上位層における事物構成のモメントとして加わる」とするのである。これもまた訴訟をば発展する連続体として把握する多元的「場」の理論に基づいた論理であり、法の具体化・個別化の過程を把握する方法である。だが階層の論理は弁証法と異なり事物の生成・発展を説く論理ではない。「法の具体化・個別化」とは「法そのものの生成・発展ではなく、その構成上の推移・進展に外ならない」と言われているからである。この考察の仕方はハルトマンの用語である「上部構築」の概念に対応する。ハルトマンは「範疇法則」の中で「上部構築」と並んで「上部形成」の術語を使用しているが、両概念の厳密な使い分けがされていない。この点の反省に基づいて、ハルトマンは「精神的存在の問題」の中で範疇の再現に関連して次の如く述べている。存在層の重なりの中で最初の切れ目には「上部形成關係」が、その他の二つの切れ目には「上部構築關係」が存在する。前者にあっては低次のものの範疇が高次のものの中で全面的に再現するが、後者にあっては低次のものの範疇の本質的部分（たとえば空間範疇）は再現しないで、切れ目でそれが中断する、と。このような概念規定をした上で、更にハルトマンは「実在的世界の構造」の中で「再現の法則の厳密な定義」として次の如く述べている。「低次の層の全範疇実質が高次の層のその中に再現する時は、たとえそれがいかに従属的な位置に押し込められようとも、高次の存在層による低次の存在層の『上部形成』があることになる。これに反して低次の範疇の一部し

か高次の範疇の存在の中にはいつて行かない時は『上部構築』がある。^(三)これによって見るにハルトマンの階層体系は上部形成関係と上部構築関係とから成る四層の統一だということが明らかである。しかしてこの統一の靱帯をなすものは「基礎的範疇」の一貫した再現様式と「規定の型の上昇」であり、これらはいずれも上部形成関係を表わしていることは前述の通りである。右によれば階層理論における「構成の論理」は「上部構築」関係を表わしているものと思われる。このことは階層理論の「包摂」の概念内容（前出）に合致する。「法の具体化・個別化」が「法そのものの生成・発展」とすれば、これは正さに「上部形成」の論理ではあるまいか。ハルトマンは唯物論的並びに観念的進展の論理を認めない。いずれも範疇法則特に「依存法則」の全内容に反するからである。この点「訴訟」の発展過程を把える方法としての動態的考察に「進展」(evolution) の思想を取り入れながらも、中村博士が弁証法論理と区別して「構成の論理」を提唱されたことは、その発想においてハルトマンと機を一にするものと言えよう。しかし中村・階層理論は、上部構築関係でもって尽きず、そこには上部形成関係も並存し、内包されているものと解されるが、^(四)これについては後（裁判理論）で触れることにする。

- (一) 「精神的存在の問題」(第二版) 六六頁—六八頁、一五頁以下並びに「実在的世界の構造」(第三版) 七頁参照。
- (二) 「精神的存在の問題」同右。
- (三) 「実在的世界の構造」第五一節の六。
- (四) 右の註(三)で「上部構築」と「上部形成」の概念規定をハルトマンの著書から引用したが、若干問題点があると思われるので付記する。低次の範疇が「全面的に」再現する場合を上部形成、しからざる場合が上部構築だというのが、両者の概念内容であった(本文)が、ハルトマンは必ずしもかかる規定に拘束されていないようである。すなわち「上部形成」の概念を広狭二義に使い分けていると解されるのである。従ってそれと共に「上部形成」と「上部構想」が二律背反の関係にある

とは考えられていないようである。先ず狭義の厳密な意味での「上部形成」関係は、物理物質的存在層と有機的存在層との間における範疇の「全面的」再現の場合にのみ限定されている。たとえばハルトマンは「哲学入門」(Einführung in die Philosophie 7. Auflage, S. 122—123.)の中で次のように言っている。「『上部形成』という表現は、高次の層において低次の層の形成物のいかなるものも消滅しない、ということに基づいている。だがこのことは範疇的構造が二つの層において同一である場合にのみ可能である。上部形成関係においては、低次の層の範疇はすべて高次の層の中へと移行しなければならぬ。われわれはこの関係をたとえば空間と時間の範疇において認めることができる。すなわち物質と全く同様に有機体もまた空間的、時間的形成物である。」このように有機的層は無機的層の上部に形成され、後者は前者のいわば質料となっているのである。だが有機体と心的存在との間では範疇の再現は事情を異にする。空間はもとよりこれと密接な関連をもった、たとえば物質的な実体、数量関係もその再現が認められない。すなわち有機的なものと心的なものとの境界において上部形成関係が中断され、新たに上部構築関係が開始されるのである。この場合低次の層は質料としてあるのではなく、高次の層の存在基礎となっているのである(「実在的世界の構造」第五八節の二 参照)。ところが広義に「上部形成」を解せば、右の上部構築関係の存するところでも、上部形成の契機が認められるのである。例証として以下若干引用する。「ここで上部形成は決して単に物理的存在と有機的存在との間にのみ起るものではないということを想起してもらいたい。基本的範疇が一切の層を貫いており、高次の範疇のうちでとにかく多くのものが上方へ再現するから、ある限界内においてはあらゆる層距離において上部形成もまた起るのであって『純粋な』上部構築関係はおそらく全く存在しない。低次の範疇の一部はまさしく高次の範疇的構造の中には入り込むのである。……低次の範疇はどこでも上の方へ行くときは一種の範疇的質料を形成する。」(「実在的世界の構造」第五八節の二)「或る限界内においては」とはたとえば時間範疇などに着目して言われているのではあるまいか。更に規定の型の階層に関してハルトマンは、「存在するものとその範疇との普遍的な階層に対応して、規定の型の階層においても、低次の型は常に高次の型において共に规定的である。……規定の重なりにおいて、上部形成はいたるところで、しかも一般に上部構築関係を示すところにおいても、標準的であるように見えることに注意すべきである。」(同右)と言っている。これは本文の目的連関の分析で見て来たところである。右と関連して更にハルトマンは「こ

こに少しも矛盾が存しないということは、常に低次の範疇の一部分は高次の層において、他の同様に本質的な範疇が中断するところでも再現するという上で触れられた事実から出てくる。『純粹な』上部構築関係は存在しない。そこには常に或る種の上部形成がいり込んでいる。そして規定の上昇は一貫して後の種類のものに見える。』(同書第六一節の一)と言う。右からしてハルトマンの概念規定にあいまいさのあることは否めないが、これは不連続の連続の問題解決の指示を両概念に求めているからだと思われる。一見矛盾に見える概念規定も要するに着眼点の差から生じたものであって、上部形成か上部構築かといった二者択一なものではない。上部形成関係の併存を認めない上部構築関係は存立し得ない。『純粹な』上部構築関係は存在しないといわれる所以である。従って広義には(一)規定の型の上昇、(二)基本的範疇並びに、(三)一部の範疇の一貫した再現が、上部形成概念に含まれる。この広狭二義は、個々の範疇の再現に着目した場合と全体の範疇に着目した場合との視座の相異に基づくものではあるまいか。この点、中村博士が「学問の方法とその吟味」の項で述べられていることは示唆に富む。すなわち「考察方法が異なれば、同一の対象事実が、異なる形相において把握されることになる。またすべての考察方法の間には、対偶的組合せが存する。例えば、現実的考察と理念的考察、具体的考察と抽象的考察、個別的考察と一般的考察というが如し、学問の発達により、考察方法もまたその数を加える。微視的考察と巨視的考察など、その新たなものに属する。』(「学問の方法と訴訟理論」七頁)。なおこの「対偶的組合せ(Gegensatzpaar)」に関し博士は、「すべて対偶関係にある考察方法は、相互依存の關係にあつて、その一方のみによって正しく対象を把握しうるものではない。」「(訴訟上の請求の個数と範囲」二八九頁)と述べられている。従ってこの考察方法に基づき「法の具体化・個別化の過程」を論理的に把握するためには「同じく発展の論理であっても『構成の論理』いわば微視的な論理と必要とする。」「(学問の方法と訴訟理論」三五頁)といわれるわけである。

(三) 肯定の論理

(1) 肯定の論理と層独立性の法則並びに質料の法則

「包摂の論理」は下位層の事物が上位層の事物の構成のモメントとなる「限りにおいて」上位層に包摂されるとなります。では包摂されない下位次元の事物はその独立性を失うかという点、そうではない。包摂の論理は「否定の論理」の介在を容認しない。下位次元は上位次元に「包摂」されることによって「止揚」(Aufheben)されてしまうのではない。これを裏書しているのが「肯定の論理」である。すなわち、「下位次元の事物が上位次元の事物構成のモメントにならないことは、それを否定したことにほならない」とされるのである。この論理もまた次元観の当然の帰結である。「肯定の論理」は下位次元の存在の独立性を肯定する。従ってこれは範疇法則における「層独立性」並びに「質料」の法則に符合する。「層独立性の法則」によれば、「高次の範疇は低次の範疇なしには成立しないが、低次の範疇は高次の範疇がなくても成立する。従って低次の範疇は高次の範疇によって制約されず、自ら独立して決定をなす」のである。これは、たとえば、下位次元にある私法学の理論に妥当する。私法学もそれ自体としては自己閉鎖的な体系をなしているからである。更に「質料の法則」によれば「低次の範疇は高次の範疇の原理ではなく、新しい形成の質料にすぎない。その上部における高次のものの活動余地は無制限である。従って低次の範疇は、一切の高次の範疇に対して無関心な態度をとる。」右の如く、低次の範疇の独立した決定作用と無関心な存在の仕方とは、「肯定の論理」内容に該当するものと解される。

(2) 肯定の論理と妥当・凝集法則

階層理論は対象を層位的に構成し、これを法の階層と法学の階層に分ける。しかも上下の次元関係とは別個に、二つの体系間の横の対応関係に着目している。「包摂の論理」と「肯定の論理」とは相互補足の関係にある。階層理論

はその理論的出発点として、「学問はその対象の占める次元から出発して理論を構築する」となす。従って階層における事物構成のモメントは、その階層の法規範により作り出されることになる——もちろん事物構成に当っては、上位階層に包摂された下位階層のモメントが加わることは言うまでもない。かくして「包摂の論理」と「肯定の論理」とは相俟って階層理論の縦と横の仕組を構築する。それはあたかも範疇法則の四本の柱たる階層・依存法則と妥当・凝集法則とが相互に依存して実在的世界の理論を構成しているに同じである。「肯定の論理」は「妥当・凝集の法則」に対応するものと言える（前出、永島論文参照）。

（3）「受胎・自己増殖」説の新生説・開展説

中村博士は「階層の論理」が「否定の論理」ではなくて「肯定の論理」であることと相俟って、弁証法論理のような「受胎」ないし「自己増殖」の思想を必要としないとされている。この場合の「受胎」・「自己増殖」なる語は生物学上のそれと解されるが、これと関連があると思われるのは、ハルトマンが「依存の法則」の中で述べている次の説明である。「高次なものの形成は決して本来的發展として理解されるべきではない。本来的發展という場合には、低次のものの中に高次のものが包み込まれていることが前提されている。そうではなくて、高次なものの形成は、常に新たな上部形成の現われとして理解されるべきである。」（「範疇法則」邦訳七二―七三頁）。ハルトマンによれば生物学上の「開展説」や「新生説」は粗雑に作り出された一面的な見解であるというのである。つまり「妥当法則」を見落としているのである。従って形而上学的な目的論的世界観は階層理論になじまない。「受胎」・「自己増殖」説を必要としないのは、普遍的目的論、観念論、弁証法が範疇的根本法則の転倒に基づくものとして否定されるのと同様である。

（四）事実の論理

（1）事実の論理と強さの法則

訴訟は判決を志向する一連の手続きとして連続体をなすものであるから、時間のモメントを盛り込んだ理論でなければならぬ。このように訴訟理論に時間のモメントを織り込むことを称して、中村博士は「空間座標軸の外に、時間座標軸を加えることである」と言われている。たとえば裁判時を織り込んだ例としては、起訴要件、訴訟要件、本案要件は裁判時（口頭弁論終結時）に具備されれば足りるとするが如きである。このように時間の契機を取り入れた訴訟理論によって初めて法の具体化の過程が如実に把握され得るのであって、中村博士はこれを「事実の論理」と呼んでいる。しかもこの「事実」はハルトマンが言うように理念的存在（これには時間のモメントが介在していないことは先きに触れた）ではなくて、実在的存在であり、時間的存在である。時間は逆行しないがゆえに、階層の論理は「非可逆」の論理となることは言うまでもない。「非可逆」の意味については「包摂の論理」もしくは「再現の法則」に関連してすでに述べた。ところで訴訟法学は訴訟実体論として実体法学を基礎として築かれるべきことは、階層理論における層位構造がこれをよく示している。階層理論の課題は、いかにして実体法に依拠し、実体法学に連結した理論を構築することができるか、ということであった。従って中村博士の言われる如く、訴訟法学は実体法学を基盤として築かれるべきであって、実体法理を無視し、それと無縁の関係において訴訟理論を構築すべきではないのである。「事実」の上に立脚する階層の論理は特に「依存法則」の一つである「強さの法則」と関連をもつ。これは「範疇的

根本法則」と言われる。それによると、高次の範疇は低次のそれに比べて、より被制約的、より依存的であり、この意味で弱い範疇である。これに反して低次の範疇は、より無制約的で、より非依存的であるから強い範疇である。この根本法則から三つの系が、すなわち「層独立」・「質料」・「自由」の三法則が出てくる。四者合して「依存法則」を構成する。

(2) 事実の論理と層独立性の法則並びに自由の法則

層独立性とは、高次の層に対する低次の層の独立性の意味であった。実体法学が、訴訟法学と別個に独自の理論体系を構成し得る点からすれば、「層独立性の法則」がこれに妥当することは明らかである。だが、低次の層に対する高次の層の独立性もまたなければならぬ。実体法と訴訟法とは相関的にそれぞれ別個の考察対象となり得る(「学問はその対象の占める次元から出発してその理論を構築する」Ⅱ中村・階層理論の出発点)。ハルトマンは上位次元から見た場合の上位層の独立性を、「自由」もしくは「自律」と呼んでいる。だがこの「自由」は分離的、絶対的なものでなく、関係的、相対的自由である。高次のものは存在論的には低次のものは依存してのみ自由である。けだし「強さの法則」が範疇的根本法則として階層を支配しているからである。それなるが故に「強さの法則」の系として「自由の法則」が導出されるのである。この「自由の法則」は「裁判」においてその適例が見出され得るものと解する。「裁判の理論」においては、あたかも「規定の型の上昇」の分析において「因果連関」がちくじ上部形成を受けて最上位の「目的連関」のモメントとして包摂されたように、実体法上の基礎的範疇たるべきものは、三層を一貫して再現するものと思われる。けだし「訴訟」は、現行法の下においては、訴訟法がこれを規制することは言を俟たないが、それ

を完結するのは、実体法に基づく「裁判」によってであるからである。この「実体法に依拠する」という点に着眼すれば、これは、とりもなおさず上部形成関係を示すものと言えよう。^(一)かくして中村・階層理論は「上部構築」関係に加うるに「上部形成」関係をもつることにより、訴訟に関する連続体観を完成するものと思われる。中村訴訟法学の冠冕をなすものは「裁判」理論である。

(一) 「訴訟上の請求」を、博士は次のように解されている。「『訴訟上の請求』とは、訴における実体法上の権利主張を指す。もとよりそれは、実体法的性格のものであるが、『訴訟』の『場』若しくは『段階』において主張するのであるから、訴訟法理による規整を受ける。それは当然のこととして、それなるが故に、『訴訟上の請求』が、訴訟法的性格に変質するものではない。依然、実体法的性格のものとして、実体法による裁判(本案判決)の対象となる。」(『訴訟上の請求』の個数と範囲(二八四頁))。

結 語

本稿の主題は「階層理論」と「範疇法則」を比較、検討することにあつた。いわば両理論を巨視的立場から見てきたわけである。が更にこれに付随して、両論に対する方法論的反省、吟味が必要と思われる。ハルトマンは科学の概念構成と哲学(存在論)の概念構成の共通点について次の如く述べている(「認識の形而上学綱要」二七七—二八六頁)。存在論的な概念構成には困難が伴うが、この課題を遂げるべき「方法論的視座」(methodologische Orientierungs-punkte)が欠けているわけではないとして、自然科学の方法を援用している。けだし自然科学の方法は根本的には

存在論的であると解しているからである。すなわち自然科学のすべての概念は、内在的な意識の世界に対して、それを越えた異質の自然存在を「理性の論理的手段」によって把握する試みだからである。これは観察と実験による対象の科学的概念構成である。しかしてハルトマンは哲学もまた科学と同じ視座に立つと言う。哲学も絶えず超越的对象を把握すべく概念構成に努めるからである。哲学は存在の「全体」を、科学はその一部を対象とする。科学が「分科学」といわれる所以である。われわれは範疇によって対象の「本質特徴」(Wesenszüge)を概念的に把えようと試みる。ハルトマンは言う。すべての客観的概念構成は一般に「存在の有限化」(Verendlichung des Seins)にすぎないが、存在に対する関係は廃棄されない、と。われわれは数学の思索における無限者や連続の概念をもって、実際の無限者や連続を考える如く、存在論においても同様である。われわれは存在を試みに概念をもって輪廓づけ、限定し、有限化する。いわば「投射的概念構成」(Projektive Begriffsbildung)によって存在に触れることができるのである。われわれは、合理化されていない残余を実際には認識していないが、「思惟は本来常に認識よりもすでに一步先きんじている。」すなわち思惟の概念は常に認識さるべきものを暫定的に固定せしめる。「思惟の概念構成は鈍い認識に対して常に先取 (Antizipation) であり、投射 (Projektion) である。」いかにしてこのことは可能か。「範疇法則」がその基本構造を示している。しかしてハルトマンはこれにより存在論の体系(総論と各論)を構築した。他方、中村・階層理論は、訴訟の「全体像」を把握するための方法論として「階層の論理」を構想した。訴訟の存在論とも言うべきものである。けだし対象の全体的把握は、個別理論的考察を内包し、しかもこれを「包越」した統一的考察方法を必要とするからである。しかして「階層の論理」は個別的学の体系構築の方法の全体と言うべきものである。こ

れに加える対象認識の手段としての微視的考察法が必要である。中村博士はこれを総括して「対象の対偶的考察方法」(前出)^(二)と称しておられる。この方法はこれまたハルトマンの「投射的概念構成」とその発想が近似している。方法論的反省検討は今後の重要課題だと思われる。

(一)「訴訟上の請求の個数と範囲」なる論文は、いわば階層の論理(総論)に対する各論である。考察方法の具現化した例である。